

諫早湾を「海の畑」に戻そう

銀座日本料理組合理事

友利 健三

(東京都港区 68)

東京に住みながら有明海のことを心配するのを、奇異に思われるかも知れませんが、現実はそのような悠長な話ではありません。有明海は世界に同じものがない貴重な海なのです。東京湾がそうであったように、日本の入り江や湾の美景は世界遺産に相当し、海の幸に満ちていたのです。

多くの国民がそれを知らぬ間に、経済発展の美名のもと、金もうけのために美しい海は葬られてきました。諫早湾干拓事業も例外ではないと考えます。世界の海を知るようになって、様々な生物を擁した多彩な日本の海の価値を知った人も少なくないでしょう。諫早の例を挙げれば魚介では二枚貝のタイラギ、のりなどは高品質で、東京でも料理の達人なら知らぬものはないのです。それ

をいとも簡単にはないがしろにしたのは無知と呼ぶほかはありません。魚介類はすべて、所が変われば品質も変わります。埋め立てて農業を、という発想はどこから生じたのか。世界遺産を捨てようとしたのも同じです。入植した農業の方には気の毒ですが、天然の「海の畑」こそがあるべき姿でしょう。回復の手立てが遅れては取り返しがつきません。開門調査を命じた高裁判決の受け入れを表明した菅直人首相には、「宝の海」再生へ一日も早い開門を望みます。